論　文　ニダバ (*Nidaba*) 42(2013), 40-49

近代広東語の音韻変化に関する考察

―香港，マカオの欧文資料を中心とした広東語の音韻変化―

山　崎　　誠

はじめに

中華人民共和国には「普通話」と呼ばれる標準語以外に、さまざまな方言がある。「言語学大辞典」では、中国の方言を、「北方語」、「呉語」、「湘語」、「贛語」、「客家語」、「閩語」、「粤語」のように、大きく七つの方言に分けられている。そのうちの「粤語」は、いわゆる広東語の通称である。

本稿では中国広東省を中心に話されている南方方言の一つ「広東語」の音韻的特徴を考察し、中国における「標準語」との音韻体系の違いから音韻的特徴を考察する。

そして近代広東語で起こったとされる「単母音から二重母音への推移」をテーマとして、現代音声学、音韻論、また伝統的中国音韻学のそれぞれの視点から考察を進める。特に音韻体系の違いから見出される広東語の音韻変化、「単母音から二重母音への変化」を中心に考察を行う。

1. 広東語の音韻変化に関する先行研究

1.1 中国における研究

広東語の単母音の二重母音化に関する先行研究に関して、李新魁(1990)はその著書の中で広東語の語末の母音である韻 i, u, y に 3 種類の二重母音化がおこり、これら 3 つの母音は、ほぼ同時期に並行して発生したと指摘している。

また、彭小川(2004)は、『分韻撮要』の音韻分類を広東省の各方言音にもとづき、近代音と現代音を比較している。

1.2 日本における研究

日本での研究においては、高田時雄(2000)が、近代広東語の音韻変化について、「十九世紀から現代に至るまでのあいだに、粤語の母音は *i→[ei] の変化をたどったと考えられ、近代粤語が経験した高母音の複母音化 *y→[øy] が起こっていると指摘している[1]。

〔1〕李新魁(1990)　*i → ei , *o → ou , *y → øy

〔2〕彭小川(2004)　*i → ei , *y → øy

〔3〕高田時雄(2000)　*i → ei , *y → øy

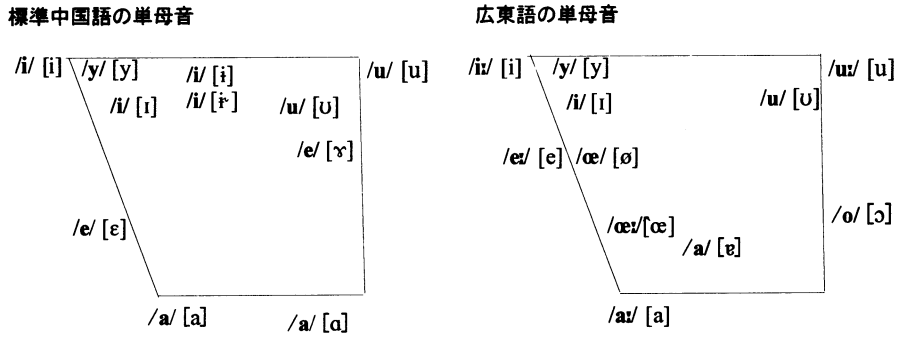
上記の先行研究から、広東語との音韻体系の違いに着目し、また標準語との相違点なども考慮し、この現象についての解釈をテーマとして考察を行う[2]。ここで共通しているのは、単母音から二重母音に変化しているということである。

2.「広東語」と「標準語」の音韻

現代中国語の標準語の音韻については諸説あるが、『現代中国語総覧』(2007)および馮蘊澤(2007)によると、単母音として 11 の母音があり、また広東語は、千島栄一(2004)、スティーブン・マシューズ、ヴァージニア・イップ(2000)、『現代広東語辞典』(1994)、『商務新字典』(2007)、『廣州話方言詞典』を参考に 11 の母音にまとめた。広東語には母音の長短があるが、標準語は長短を区別して表記されない。そのためここでは、単母音と二重母音を分けてその体系を調べることにする。

2.1 単母音

(図1)標準語と広東語の単母音



標準中国語の単母音は a, ɤ, i, u, y の5母音体系であり、また現代広東語において、単母音は長短を区別するため、短母音 ɐ, ø, i, u の4母音、長母音 aː, ɛː, œː, iː, ɔː, uː, yː の7母音体系となる[3]。

上記(図1)から、標準語及び広東語のそれぞれの音韻を体系化し(表1)のようにあらわした。

また、先行研究から標準中国語は 5 母音体系に、広東語は長短を分けて、短母音が4母音体系、長母音が7母音体系としてまとめられる[4]。

(表1) 標準中国語と広東語の母音

標準中国語			広東語					
			短母音			長母音		
i	y	u	ɪ		ʊ	iː	yː	uː
		ɤ		ø		ɛː	œː	ɔː
	a			ɐ			aː	
「5母音」			「4母音」			「7母音」		

中国の標準語は一般的には長短を意識しないが、広東語の母音には長短の区別があり、さらに y は双方に共通する。ここでは音韻論的に先行研究から広東語の [yː] を長母音と解釈することにする[5]。

2.2 二重母音

先行研究を参考に二重母音について以下のように解釈を求め、二重母音の前後の音の調音点の移動を重視し、母音体系の特徴を捉える。二重母音の種類について、本稿では以下の3つを参考に考察を進める。

- 服部四郎(1951)は、二重母音を主音、副音に分け、主音が先のものを降り二重母音とし、逆を昇りとしている。また両母音の間に主副の区別の認めがたいものを平らとしている。
- 竹林滋・斎藤弘子(2008)は前半後半に分け、前半が後半より強いものを下降としている。
- 『現代中国語総説 』(2004)では 2 種類にわけている。(「複韻母」と「二重母音韻母」の二種類の表記がある)前の構成要素が後ろよりも良く響くものを下降としている。

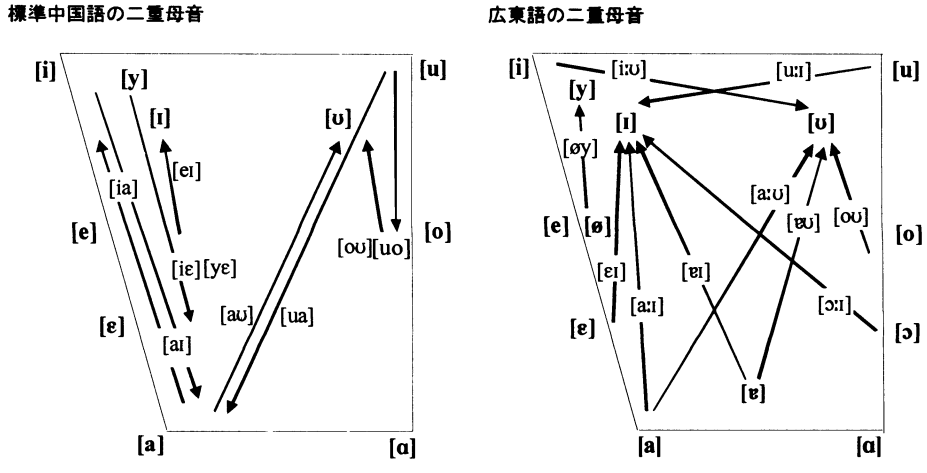
上記以外にも二重母音の定義として、『言語学大辞典』では「**二重母音の「調音点の移動」が「上向き」あるいは「下向き」として定義している**」ことから本稿では「**調音点の位置が前半より高くなっていくものを上向き、低くなるものを下向きと考える**」ことにする。これをもとに「二重母音の調音点の移動」を重視し考察を行う。

2.3 現代中国標準語と広東語の二重母音

〔4〕 標準語の二重母音の組 ： 上向き [aɪ] [aʊ] [oʊ] [eɪ] / 下向き[iɑ] [ua] [iɛ] [uo] [yɛ]

〔5〕 広東語の二重母音の組 ： [aːɪ] [ɐɪ] [aːʊ] [ɐʊ] [ɛɪ] [øy] [ɔɪ] [uːɪ] [iːʊ] [oʊ]

(図2)標準語と広東語の二重母音



2.4 標準中国語と広東語の二重母音の特徴

上記(図3)は標準語と広東語の二重母音に関して、調音点の移動に視点をおき、その移動を図に表したものである。この図から、標準語は、調音点の移動からみると以下のように二重母音の二つの音素が交替してペアをなして対応している(矢印が往復している)という特徴が見られる。

また広東語の二重母音は、調音点の移動を見ると、[øy]を除き、二重母音の副音が[ɪ]、[ʊ]に集約されていることがわかる。

〔6〕標準語の二重母音の特徴　[aɪ]⇔[iɑ]　[iɛ]⇔[eɪ]　[aʊ]⇔[ua]　[oʊ]⇔[uo]

〔7〕広東語の二重母音の特徴

[ɪ]が終声: [aːɪ]　[ɐɪ]　[ɛɪ]　[ɔɪ]　[uːɪ]

[ʊ]が終声: [aːʊ]　[ɐʊ]　[iːʊ]　[oʊ]　　例外　: [øy]

3. 広東語の音韻的特徴

広東語の音韻的特徴に関しては、音韻、方言字を参考にすることができる。王燾、王理嘉(1995)では、標準語の[xu-]が一部の広東語では [f-] になるものがあると指摘し、またこれ以外に、[k^h-]、[ɕy-] を持つ漢字も [f-] になるものがある。これらの特徴を以下の表にまとめた。

(表3)標準語と広東語の音韻の違い

	苦	款	課	火	訓	勲
標準語	[k^hu]	[k^huan]	[k^hɤ]	[xuo]	[ɕyn]	[ɕyn]
広東語	[fu]	[fun]	[fɔː]	[fɔː]	[fɐn]	[fɐn]

〔8〕王燾、王理嘉の広東語[f-]の対応

中国標準語: [k^h-]、[xu-]、[ɕy-]の一部 ⇔ 広東語: [f-]

3.1 方言字について

中国語の方言字は、標準語にはあまり使用されない方言特有の発音をあらわすものであり、各方言には、慣習的に少なからず特有の方言字をもつ。広東語の表記に用いられる方言字に関しては、『現代廣東語時辭典』にある広東語の方言字を参考に『増訂華英通語』の中から該当するものを調べた。その結果いくつかの代表的な「広東語の方言字」がその著書の中で使われていることがわかった。以下にその代表例を挙げる。

〔9〕『増訂華英通語』(福沢諭吉 1860)における広東語方言字の例

咩[mɛː]、嬲[nɐʊ]、乜[mɐt]、啲[tiː]、啱[ŋaːm]、嗲[tɛː] など

4. 近代における広東語研究

近代における広東語に関しては、16 世紀に中国の明朝がポルトガルに対してマカオの永久居留権を与えて以来、西洋の文化がキリスト教とともに広がり、マカオが極東の拠点となった。その後 1800 年代になると官話（当時の標準語）や広東語の漢訳聖書や辞書、単語集などが数多く出版され現在も数多く残っている。

また広州は、1842 年にイギリスが南京条約により香港を領有したことから香港にも西洋の文化が流入し、国際貿易の中継地点として発展した。その後、イギリスが産業革命により大国として発展を遂げ、経済的にも優位に立ち、それに伴ってアジア貿易の覇権争いの力関係がポルトガル領のマカオからイギリス領の香港へと徐々に移行していった。この時期に活躍した Robert Morrison や S. W. Williams などが広東語訳聖書や、字典、語彙集などの著作を残し、当時の広東語などの方言を知る貴重な資料となっている。

4.1 マカオにおけるポルトガル語の広東語学習書

以下の二冊は、マカオ大学図書館に所蔵されているポルトガル語で解説された広東語学習書である。香港と比べるとマカオは広東語に関する資料が少ないが、ポルトガル語で書かれたマカオの広東語ということを考えると、これらは当時の広東語を知る大変貴重な資料であると言える。

『新讀本 二巻』　(San-Tok-pun, Novo methodo de leitura 2° livro 1908)

『國文教科書』　(Livro para Ensino da Litteratura Nacional Kock Man Kau Fo Shü Traduzido em portuguez 1912)

この『新讀本 二巻』の著者 José Vicente Jorge について、マカオ在住のジャーナリストのウェブサイト「Macau Antigo」の記述から José Vicente Jorge は若いころから中国語を学び、ポルトガル公館の通訳を務めるほどの語学力であったことがうかがえる。

4.2 ポルトガル語の広東語学習書における音韻

『新讀本 二巻』および『國文教科書』の中の音韻は、両資料を見ると上記の例字のほとんどが「単母音」で記述されているが、『新讀本 二巻』の下線部の例外ように「佢」*k'ei は、二重母音で表記されていた。

〔10〕『新讀本 二巻』および『國文教科書』の音韻　（記号は原本通り）

	『新讀本 二巻』	『國文教科書』	現代広東語
居	*kü（単母音）	*kü（単母音）	[køy]
佢	<u>*k'ei</u>（二重母音）	*該当音なし*	[k^høy]（彼・彼女）

5. 中国における広東語の韻書

『分韻撮要』は、中国で最初の広東語の韻書といわれている。再編されているためはっきりとした年代や著者はわかっていないが、その中でも『江湖尺牘分韻撮要合集』は、現存する中でも初期のものとされ、彭小川

(2004)の著書によると初版は1782年と言われている[6]。この韻書は上下2つに分けられており、上段は『江湖尺牘』という手紙の例文が、下段には漢字音が編集されている。香港五桂堂書局出版の『新編寫信必讀分韻撮要合璧』も上記同様であり、周冠山の韻書にもとづき再編したものであると思われる[7]。周冠山の『分韻撮要』の年代は不明だが中島(1994)は、1850年ごろであると著書の中で述べている。これらの韻書は、のちの広東語の音韻を知る貴重な資料のひとつである。

5.1 二つの『分韻撮要』

ここでは、『江湖尺牘分韻撮要合集』と『新編寫信必讀分韻撮要合璧』の二つの韻書を参考にして考察を行う。まず、二つの韻書の字彙總目(目次)の項目に関する相違点を調べた。これらの韻図が広東語の音を反映した韻書であるかについては、「二十三 科火貨」の項を見ることで推測される。この項の代表字「科火貨」は広東語ではいずれも[fɔː]と読み、標準語では [kɤ、xuo、xuo] となり一致しない。そのためこの韻書が広東語をあらわしているものだと考えられている。

これら2つの『分韻撮要』の分類をもとに、[yː]と[øy]の音を含む項を調べたところ「第四 諸主著」:[-yː] および「第二十二 雖水歳」:[-øy]の二つが該当した。さらに「第四 諸主著」では、標準語、順徳方言では前述の例にある韻母は[yː]であるのに対して、広東語では[øy]と[yː]の種類あることがわかった。(代表字のうち、太字は韻母が[øy]の音であり、それ以外は[yː]である。)

「第四 諸主著」 (表5)

平聲 : 諸 趨 拘 居 舒 婿 虚 於 于 閭 徐 除 魚 渠 殊

上聲 : 主 許 舉 暑 咀 處 嫗 取 宇 呂 語 緒 宁 拒 女

去聲 : 著 句 庶 飫 娶 去 處 諭 具 序 茄 慮 樹 住

「第二十二 雖水歳」の例では、標準語は[uɪ]であり、広東語は[øy]である。この項には例外が見られない。第四と第二十二を照らし合わせると、広東語の[øy]には、音韻の分類が複数の組があると考えられる。

「第二十二 雖水歳」 (表6)

平聲 : 雖 哀 追 推 誰 錘 隨

上聲 : 水 髓 揣 嘴 彙 蕊

去聲 : 歳 税 翠 帨 醉 遂 戾 睿 墜 睡

〔11〕『分韻撮要』における音韻のまとめ

	標準語		広東語
「第四 諸主著」	[-y]	:	[-øy]および[-yː]
「第二十二 雖水歳」	[-uɪ]	:	[-øy]

(表7) 『分韻撮要』字彙總目の相違[8]

	江湖尺牘分韻撮要	寧信必讀分韻撮要
第一	先鮮線厲	先鮮線厲
第二	威偉長	威委長
第三	機紀記	機紀記
第四	諸主著	諸主著
第五	修叟秀	修叟秀
第六	東董凍篤	東董凍篤
第七	英影應益	英影應益
第八	賓稟擯畢	賓品擯畢
第九	張掌帳著	張掌帳著
第十	剛講降角	剛講降角
十一	朝沼照	朝沼照

十二	孤古故	孤古故
十三	鴛婉怨乙	鴛宛怨乙
十四	皆解(介)	皆解介
十五	登等橙德	登等橙得
十六	師吏四	師吏四
十七	金緊禁急	金緊禁急
十八	交較教	交較教
十九	裁宰戴	裁宰戴
二十	兼檢劍劫	兼檢劍廂
二十一	津鹽進卒	津鹽進卒
二十二	雖隨祟	雖水祟

二十三	科火貨	科火貨
二十四	緘減鑒甲	緘減鑒甲
二十五	翻反泛發	翻反泛發
二十六	家賈嫁	家賈嫁
二十七	官管貫括	官管貫括
二十八	魁賄誨	魁賄誨
二十九	遮者蔗	遮者蔗
三十	趣幹劃	趣幹劃
三十一	甘敢紺始	甘敢紺始
三十二	彭棒硬額	彭棒硬額
三十三	吾五梧	吾五梧

これら二つの韻書の分類は、声調で分類したものであるが[9]、これ以上の分類は見られない。そこで、時代をさかのぼり、他の韻図に照らし合わせて調べることにする。

5.2 韻図における広東語 [øy] の分布

この章で扱う韻図であるが、『韻鏡』、『廣韻』の声母(語頭子音)に関しては諸説あるため『廣韻切韻譜』(辻本晴彦 2008)を参考に、該当する部分を抜粋して音韻の分布を考察する。

表中の声母の音韻に関しては、藤堂明保(1979)を参考に(表8)を作成した。

佐藤昭(2002)では、舌音は摩擦音、唇音は、奉[bv]、微[ɱ]、匣[ɣ] などの記述があり、また李敦柱(2004)は歯音のうち、正歯二等(歯上音)を荘、初、牀、疏に分類し、正歯三等(正歯音)を照、穿、神、審と分類している。またこのほかにも諸説あるが、本稿では特に言及しない。

(表8) 中古音の声母分類表

歯音舌		音喉				音歯					音脣				音舌				音牙			
清濁	清濁	清濁	清	濁	清	濁	清	濁	次清	清	清濁	濁	次清	清	清濁	濁	次清	清	清濁	濁	次清	清
日 [ɲʑ]	來 [l]	喩 [y]	影 [ʔ]	匣 [ɦ]	曉 [h]	邪 [z]	心 [s]	從 [dz]	清 [tsʰ]	精 [ts]	明 [m]	並 [b]	滂 [pʰ]	幫 [p]	泥 [n]	定 [d]	透 [tʰ]	端 [t]	疑 [ŋ]	群 [g]	溪 [kʰ]	見 [k]
						禪 [ʒ]	審 [ʃ]	牀 [dʒ]	穿 [tʃʰ]	照 [tʃ]	微 [w]	奉 [v]	敷 [fʰ]	非 [f]	娘 [ɲ]	澄 [ɖ]	徹 [ʈʰ]	知 [ʈ]				

「内転第十一開」　魚韻[io]、虞韻[iu]

三等「牙音」(清、次清、濁)「舌音」(濁、清濁)「歯音」(濁、清、濁)「喉音」(清)

「内転第十二開合」

三等「牙音」(清、次清、濁)「喉音」(清)「半舌(舌歯)音」(清濁)　四等「歯音」(次清、濁、清)

これら韻図の環境をまとめたものが以下の(表 10)である。伝統的な中国語音韻論の五音の分類と現代言語学における調音点を併記した。おおまかな分類ではあるが、調音点が軟口蓋と歯茎の場合に二重母音化が見られることがわかる。

(表 10) 調音点からみた音韻の違い

五音	調音位置	例	広東語	標準語	日本語	
牙音	軟口蓋	区	[k^{h}øy]	[tɕ^{h}y]	ク	[kɯ]
		居	[køy]	[tɕy]	キョ	[k^{j}o]
舌音	歯茎	女	[nøy]	[ny]	ジョ/ニョ	[d^{j}o / ɲo]
歯音	歯茎	須	[søy]	[sy]	ス	[sɯ̈]
		取	[ts^{h}øy]	[tɕ^{h}y]	シュ	[dzɯ]
		聚	[tsøy]	[tɕy]	ジュ	[dzɯ]
喉音	軟口蓋	去	[høy]	[tɕ^{h}y]	キョ	[k^{j}o]
半舌音	歯茎	慮	[løy]	[ly]	リョ	[ɾ^{j}o]

6. 二重母音化の解釈

本考察のまとめとして長母音 y が二重母音へ音韻が変化した経緯を考えてみたい。一つの解釈として以下のように考える。

①広東語の単母音は開母音であり、かつ長母音であることから、その分別的素質は長さであると考える。

②長母音の長さを単母音＋ α の長さの持続または連続と考える。そして長母音の長さを分別的にとらえ母音の持続(または連続)をii, yyなどのように考える。

③前方に子音のない「魚、雨」などは変化していないことから、子音の影響を考えた。軟口蓋と歯茎に調音点がある場合に長母音 y: が音割れを起こし、ii, yy の前方の音が前の子音の影響を受けて前方の音の調音点が下がり、変化したと考える[10]。yy (y:) > 〔y→ø〕y > øy

これらの条件以外にも要因が考えられるが、スウェーデンの方言にもみられるように、広東語の長母音が子音などの影響を受け、前方の調音点の変化を引き起こすという音韻変化の可能性を本発表における一つの結論としたい。

7. 結語

音韻変化を考察するにあたり、変化した調音点の移動が一つの指標になると考える。本稿では「二重母音の調音点の移動」が言語の音韻体系を特徴づけることができ同じ系統にある2つの言語(方言)に対しても、「二重母音の音韻体系」を弁別的な指標として特徴付ける結果が得られたと考える。また長母音が二重母音に変化する際、ある環境で前後の音韻が割れ二重母音かを促したと考えるきっかけにもなった。

また、欧文資料からの二重母音の揺れ、中国の資料からは二重母音化が起こると思われる環境を考察し、他の言語を参考に先行研究から音韻変化の現象を考えた。

これからの課題としては 19 世紀の音韻変化および音韻の揺れ，そして現代においても起こっている二重母音化の現象について，その要因を明らかにすべく，多方面から研究を続けていきたいと考える。

特にポルトガル統治のマカオ，イギリス領の香港，18 世紀半ばに対外開放された中国の広州，この三つの地域の主権の推移など歴史的背景なども言語に影響する要因と考える。これからの研究課題として，さらに多くの漢籍、欧文資料にあたり，歴史的な時間の経過を縦軸，地理的な条件の横軸を考え，二重母音へと移行する足跡を追うことを目標のひとつとし，また同時に二重母音化が起こる要因についても言語学的見地から考察を行いたい。

＜参考文献＞

高田時雄 (2000)『東方學報』72: 740-754「近代粤語の母音推移と表記」

ｽﾃｨｰﾌﾞﾝ・ﾏｼｭｰｽﾞ、ヴァージニア・ｲｯﾌﾟ(2000)『広東語文法』 東方書店

佐藤昭 (2002)『中国語語音史 中古音から現代音まで』 白帝社

馮蘊澤 (2007)『中国語の音声』 白帝社

服部四郎 (1951) 音声学 岩波書店

辻本春彦著 森博達偏 (2008)『附諸表索引 廣韻切韻譜』臨川書店

石川光庸、河崎靖 (1999)『オランダ語誌』現代書館

慶応義塾 (1958)『福沢諭吉全集 第一巻』岩波書店

王力 (2008 再版)『汉语语言史』 商務印書館 (初版 1985)

余迺永編 (2008)『新校互註宋本廣韻定稿本』 上海人民出版社

『廣州話方言詞典』 商務印書館

『新編寫信必讀分韻撮要合璧』（年不詳） 五桂堂書局

Roger Lass 1984. *Phonology: An Introduction to Basic Concepts.* (Cambridge. Textbooks in Linguistics

Morrison, Robert. 1815. *A Grammar of the Chinese Language.* the Mission Press. Macao

Wiliams, S.Wells . 1856. *Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect*. The Chinese Repository. Canton （中国名：英華分韻撮要）

Stedman, Thomas Lathrop 、李桂攀 1916. *A Chinese and English Phrase Book.* USA

MacauAntigo： http://macauantigo.blogspot.jp/search?q=San-Tok-Pun

WEB 韻図～韻鏡プロジェクト～ http://www.cc.kyotosu.ac.jp/~suzukis/inkyo/index4.htm

注釈

---

[1] 高田時雄 (2000)「近代粵語の母音推移と表記」東方學報 72（京都大學人文科學研究所）p.p.740-754

[2] o→ou （李新魁 1990）や（高田 2000)の音韻変化の指摘もあるが、本発表では扱わず将来の研究対象としたい。

[3] 馮蘊澤 2007 によると中国標準語における/i/ には3つの音素があると解釈されている。[i] ： 四[si]など[ts][ts^{h}][s]の後。慣習的に[ɿ]で表し、[ɨ] ：吃[ʈʂ^{h}ɨ]など [ʈʂ][ʈʂ^{h}][ʂ] の後の巻舌の i で慣習的に[ʅ]で表す。広東語の短母音は単独では現れず、二重母音の一要素となる。

[4] Phonology (Roger Lass1984) p.143

[5] 広東語の[y:]は、先行研究において千島栄一(2004)、ｽﾃｨｰﾌﾞﾝ･ﾏｼｭｰｽﾞ、ｳﾞｧｰｼﾞﾆｱ･ｲｯﾌﾟ(2000)、中島幹起の現代広東語辞典(1994)は、長母音[y:]で表されており、本発表でも長母音として扱う。

[6] 本発表では、道光 18 年(1836)に再版されたものを資料とした。

[7] P.17 に「分韻撮要字彙 元集 順徳周冠山編輯」とある。周冠山は順徳出身であると自ら名乗っているため、順徳地方の方言による編集の可能性がある。

[8] 太字部分が2つの韻書の相違点である。同じ韻母を持つため音韻体系には影響がない。また『江湖尺牘分韻撮要合集』十四の(介)は、字彙總目には欠如しているが、本編には採用されていたため( )で表記した。

[9] 「平声、上声、去声、入声」の四声

[10] (Roger Lass 1984 p.107) Malmö Swedish の例にあるように長母音が二重母音化する際に前方の音の調音点が下がる現象があげられている。